

「補足資料 22.10.19」

(年刊 129頁)

## 使徒言行録解説

本書は、紀元 30 年から 63 年までの初代教会における重要な歴史的事実を語り、福音書と密接な関係を持ち、いわば福音書の結論をなし、パウロの手紙への入門になっている。

本書が、ルカ福音書の続編であり、おのおの個別の書の形式をとっていても、もともとは一巻にまとまった書と言えよう。

つまり、イエス・キリストの先駆者である洗礼者ヨハネの誕生の告知に始まり、当時の異邦人世界の首都であったローマにおいて「神の国を宣べ伝え」、主でありメシアであるイエス・キリストに関して教えるところで終わる一巻の書となる。

内容 第三福音書の主題の一つ、「イエス・キリストによってもたらされた贖いの普遍性」は、本書においても描き出されている。つまり、主イエスの復活と昇天、神の民の聖なる都エルサレムでの聖霊降臨による教会の誕生から、異邦人の使徒パウロによって、福音がローマ帝国の中心であるローマにもたらされるまでの歴史を述べる。

1-12 章は、「十二使徒」の頭であるペトロに焦点をあて、誕生したばかりの教会がエルサレム、ユダ、サマリアにおいてどのように成長発展していったかを述べ、13-28 章は、異邦人に対する宣教の主演パウロに焦点をあてつつ、三回にわたるその宣教旅行について述べ、彼のローマへの移送をもって全体を締めくくり、どのようにして福音が「地の果てまで」もたらされたかを叙述する。

教会が、聖霊降臨に日にエルサレムのユダヤ人共同体の中に生まれてから、ローマ帝国の異邦人の間に次々とキリスト共同体として存在するようになるまでの成長過程を描くに当たって、著者は、教会が使徒の教えを通して世界に明らかにされた神の神秘であるという点に、特に留意している。また、著者は、第一の書である福音ですでに強調した聖霊の働きを、本書においても重視している。このことから、著者は「聖霊の福音記者」とも呼ばれてきた。

説教 本書には 18 の説教があり、それらの多くは、演説者が直接行ったものではなく、その本の著者の手になるもので、演説の時の雰囲気や状況を示し、人々や事柄について判断を下し、あたかも本人が話したかの如く、有名な人物の口を借りて、著者の思想や考えを披露したものである。それらの説教には、著者が好んで用いた表現や文体や語彙などが見られる。恐らくある説教は、著者が直接聞いたものであり、他の説教は、説教者、あるいはその説教を聞いた人から聞いたものであり、また、他の説教、特に初代教会におけるペトロの説教は、著者が入手した説教の要領に手を加え、本書に収めたものであろう。著述の年代と場所 第三福音書と同じく、70 年から 80 年にかけて、ローマで書かれたのであろう。